

NPO 法人地域資料デジタル化研究会 講演記録

山梨県立大学観光講座「写真で読み解く半世紀前の山梨」

山梨県立大学地域交流センターでは、2018年度観光講座を「歴史科学的に山梨をひも解く」のテーマにより、同大の飯田キャンパス講堂で全5回にわたって開催しました。

山梨県内には自然及び人文分野のいずれにおいても、第一級品が豊富に存在し、観光資源としても寄与しています。山梨県立大学の観光講座では、これらのユニークな価値や成り立ちなどの話題を学術的に掘り下げ、山梨についてより深く知っていただけるように、専門家による講演を実施しています。

地域資料デジタル化研究会では、2018年度講座のうち、9月30日（日）の実施分を担当しました。講演の表題は「写真で読み解く半世紀前の山梨」として、当研究会デジタルアーカイブ班が公開している地域資料デジタルアーカイブ「甲斐之庫（かいのくら）」を教材として、デジタルアーカイブの文明的な意義と市民によるアーカイブ構築の実践などについて解説いたしました。

特に山梨の街や農村の様子や出来事を撮影した内田宏氏、中山梅三氏の昭和30年代の農村風景などの写真作品を紹介しながら、地域の記憶を未来に残すことについて、受講生皆様と一緒に考察いたしました。

山梨県立大学観光講座 2018 概要 （主催：山梨県立大学地域交流センター）

第1回：7月29日（日）

- ・縄文時代とは何か～日本列島における山梨の縄文文化～・・・岡村道雄（元文化庁主任調査官）
- ・山梨の古代文化を石から探る・・・・・・・・・・・・・・・・・・保坂康夫（山梨県考古学協会）

第2回：9月2日（日）

- ・日本列島形成史から山梨県内の扇状地形を読み解く・・・・・・・・・・興水達司（山梨県立大学）
- ・ヒトと自然が作り出した山梨県の昆虫相・・・・・・・・・・小粥隆弘（オオムラサキセンター）

第3回：9月30日（日）

- ・広重の歩いた身延道～甲府城下から富士川方面へ～・・・・・・・・・・新津健（山梨県考古学協会）
- ・写真で読み解く半世紀前の山梨・・・ NPO 地域資料デジタル化研究会アーカイブ班

第4回：10月14日（日）

- ・柳沢吉保と甲府城～城内に新設された能舞台の姿とは～・・・宮久保真紀（甲府城研究会）
- ・富士山の環境とその変化・・・・・・・・・・仁田晃司（環境省富士五湖自然保護官）

第5回：10月28日（日）：バスをチャーターして現地（北杜市・昇仙峡等）の視察

第1章 はじめに

事務局長：井尻俊之

今日の私たちのテーマは、「写真で歴史科学的に山梨を読み解き、昔そして今を考える」です。その前に地域資料デジタル化研究会（以下、デジ研と表記）の行っている仕事に触れます。私たちは、特定非営利活動法人で、デジタルアーカイブを構築し、それを教材として全国あるいは世界に公開するという作業をしています。具体的には、例えば身近な道祖神の姿、小正月のどんど焼きの様子、早川町の昔の古い方言の記録（受託事業）、大月の笹子追分人形の記録などの地域資料をカメラやビデオで撮影し、記録に残した上で公開するということです。

私たちはアーカイブで博物館のような仕事をしていますが、私たちの博物館というのはインターネットの上にあります。例えば写真や文書のアーカイブは約3千点の資料を公開しておりますが、これをもし、すべて紙に印刷して実物展示しようとしたら、県立美術館や県立図書館のような大きな施設がないと公開できません。けれども写真をデジタル化すると電子の小さな粒々の集まりになります。電子化、デジタル化した瞬間にそのものの重さがなくなるわけですからネットワーク上に置いておけるということになります。建物を立てれば何十億もかかる事業を、我々のデジタルアーカイブだと小さなパソコンで管理し、年間のネットワーク管理維持費が数万円で済むということです。つまり誰でも、普通の県民であっても、県立博物館あるいは図書館と同じような規模の事業ができるという証明だと思います。

デジ研は、もう一つ大事な事業を行っていて、県内市町村の公立図書館の受託をしております。山中湖村の山中湖情報創造館です。公共図書館ですが日本で初めての民営で、しかも特定非営利法人（NPO）に委託した図書館です。大変な紆余曲折がありながら実現した訳ですが、私たちの理事長小林是綱が日本で最初の公立図書館の民間人館長で、2代目の館長が丸山と申します。NPOが公立図書館を運営することは、現在でも全国では非常に少ない訳ですが、平成16年、法律の制限もある中、それを破って公共図書館に民間の活力を入れるという新しい道を示したのが私たちデジ研です。

さて、今日の学習テーマですが、平成が終わり新しい時代が来年から始まります。新しい時代に私たちがどういう方向へ進むのか、どういう方向で生きていくのか、それを考えるのが今日のテーマの一つだと思います。変革期にあつて私たちがどういう風に考えたら良いのか、それを説き起こす三つの有名な言葉があります。

「私たちはどこから来たのか」「私たちは何者なのか」「私たちはこれからどこへ行くのか？」

これが変革の時代を生きる上での基本的な指針になると思います。私たちはどこから来たのか。皆さん個人の記録はあるけれども社会全体としてどういうところから来たのか、これを記録するのがアーカイブの役割だと考えています。

私たちは今世界規模の革命の中で生きています。情報革命です。歴史では第一の波、第二の波、第三の波と呼ばれますが、第一の波は古代に起きた農業革命です。米や小麦などの農作物の生産が始まり、人々が定住しそこから社会が生まれ、国家が生まれました。大変な変革です。

その次の波というのが、17世紀の産業革命です。今まで人の手で作っていたものを機械に変えて作る、大量生産、大量消費で人々が豊かになるという新しい革命が起こりました。日本は明治維新によって産業革命の時代を迎え、「富国強兵」を目指しましたが、それは戦争という不幸な

結果に終わり、国づくりをやり直してきました。

今起きている第三の波が情報革命、高度情報社会の建設ということになります。そのシンボリックな道具が、皆さんが手元にあるスマホ・携帯電話といったものです。つまりインターネットによって人類は新たな世界を創造しております。注目すべきは、インターネットというのは、あらゆる人が情報の発信・受信について平等です。トランプ大統領はツイッターで政治を行っていますが、ツイッターで皆さんがアカウントを持っていれば、原理としてトランプ大統領と同じ立場で情報発信ができます。平等です。トランプ大統領の書き込みにツッコミを入れることができます。私たちは考えている以上にすごい情報の力を持っているということです。世界中の人々が同じ立場で情報を発信し受信し、やり取りができるのです。

今、平成という時代が終わろうとしています。そして、「私たちはどこから来たのか、私たちは何者なのか、私たちはこれからどこへ行くのか？」 日本は戦争で国を滅ぼしてしまいました。そして私たちの祖父母や父母たちは、戦争の焼け跡と混乱の中から、必死になって新しい国づくりに取り組んできました。日々の暮らしが自由で平等で、そして明るく豊かに暮らせる世の中を目指して…。

私たちデジ研は本日発表するデジタルアーキビスト、デジ研レディースを中心に2002年より非営利のアーカイブ構築に取り組んでおります。

ここから「私たちがどこから来たのか」について、山梨の戦後を記録した写真を読み解きながら振り返ります。では、ご覧ください。

なお、本日のレクチャーで紹介する地域資料デジタルアーカイブズ 甲斐之庫（かいのくら）は、以下のURLで公開されております。

<http://www.digi-ken.org/~archive/index.html>

第2章 写真を読み解く

担当：堀水清美

2-1. デジ研アーカイブズ「^{かいのくら}甲斐之庫」

私たちは地域資料のデジタルアーカイブを制作して「甲斐之庫（かいのくら）」というインターネット上の倉庫に保存し、公開しています。前段で触れましたが、写真アーカイブ、道祖神の姿、どんど焼き等、これらは学校教育、社会教育、生涯学習の教材として、また単に楽しみにも、無償でご利用頂けます。

この延長線上で、インターネットでは資料公開いたしてはおりませんが、東日本大震災で被災した資料の救出・デジタル化と再活用への支援も行いました。他にも県立文学館、甲州市の「わたつみ平和文庫」、北杜市の大泉金田一春彦記念図書館資料など文献資料の整理業務、音声資料のデジタル化を事業として行っています。

また、文化財の記録も行っており、大月の笹子追分人形の公演を記録・保存、更に山梨県の奈良田地方の方言を調査し記録する活動も行いました。これらについては後ほどご紹介します。



図 1

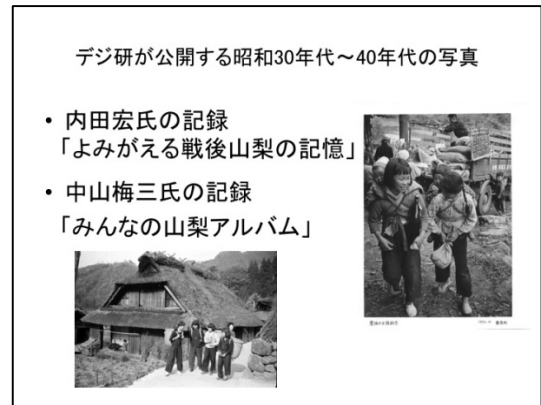


図 2

2-2. 昭和の写真アーカイブ

「甲斐之庫」の中の写真アーカイブでは、昭和30年代から40年代の記録を公開しています。これらの記録は、内田宏氏と中山梅三氏というお二方が撮った写真です。お二方について、ご紹介したいと思います。

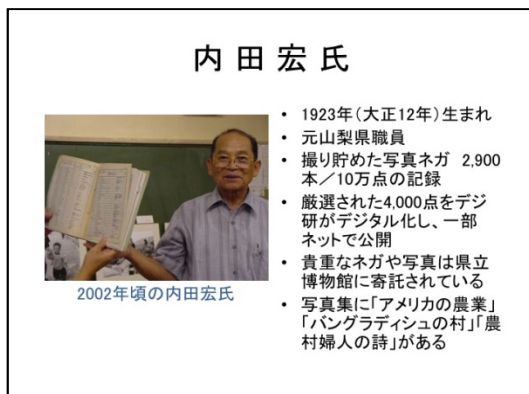


図 3

<内田宏氏>

内田氏は1923年（大正12年）生まれで、山梨県職員として農業改良普及事業に携わりました。その農業普及の記録と広報のために写真を撮り始め、公務のかたわら農村写真を撮り続けた方です。撮り貯めた写真のネガは2,900本、農家の日常や養蚕などの生業、年中行事、祭礼、農業改善活動、災害復旧等、撮影した写真は十万点に及びます。2010年にデジ研が4,000点の写真資料をデジタル化、その一部をネットで公開しています。その後、貴重なネガや写真は山梨県立博物館に寄託されました。写真集に「アメリカの農業」「バンングラデシュの村」「農村婦人の詩」などの写真集も出版されています。（図3）

現在のようにデジタルカメラのない時代で、フィルムカメラで撮影した写真の記録は全てネガ

現在のようにデジタルカメラのない時代で、フィルムカメラで撮影した写真の記録は全てネガ



図 4

とプリントされた紙の記録です。内田さんの素晴らしいところは、膨大な量の写真をきちんと整理し管理していたことです（図4の右側写真）。写真には撮影年月・撮影場所が記録されている為、歴史・民俗資料としても価値のあるものになっています。この記録があったことで、私たちがアーカイブする際に基本的なデータを作成することが出来ました。



図 5

＜中山梅三氏＞

中山梅三氏は、大正4年4月26日山梨県中巨摩郡国母村上条（現在の甲府市）生まれです。戦争中は写真報国会会員として、出征兵士、留守家族等の慰問写真を撮り、戦後復興期、貧しい生活の中ひたすら働いて生きる喜びを見つけようとした農村の人々の姿を写しました。22才の頃から写真コンテストに応募し始め、長年にわたり多数の賞を受けています。また山梨写真研究会会長、山梨写真団体連絡協議会会長などを歴任し写真集「甲州街道」、「甲州の祭り」(共同制作)、「山梨ふるさとの残像」を出版しました。(図5)



図 6

左の図6が、現在デジ研のHPで公開されているページの一例です。中央の写真は、戦後昭和天皇の第4回目のご訪問の様子を現在の県庁前、平和通り側から撮影したものです。写真とともに、当時の時代背景や写真から読み解いたり調査したりした内容を記述しています。
(<https://www.mmdb.net/usr/digiken/Yamanashi-Album/page/A0032.html>)



図 7

2-3. 写真を読み解く（その1：生活の様子）

ではここから、私たちがHP上に公開するまでにどのように写真を読み解いているかお話ししたいと思います。まずは、昭和の生活を記録した写真から見ていきます。左の写真（図7）は内田宏氏が昭和31年に中巨摩郡敷島町で撮影したのですが、この2枚の写真は同じ場所を別のアングルで撮ったものです。

小さくて見づらいかもしれませんが、プリントした写真の余白に、それぞれタイトルが記されています。左が「農協の出張販売」、右が「農協出張販売車で買物をした

この時代の特徴

2 「農協の出張販売」



昭和31年10月 敷島町
撮影/内田宏氏

「農協出張販売車で買物をした子守の少女」

図 8

籐(むしろ)と吠(かます)

藎草や蒲、藁などで編んだ敷き物の総称。敷物としての用途のほか、穀物を天日で干すのに欠かせないもの。作物の運搬にも使用。



昭和31年10月 敷島町
撮影/内田宏氏

Digi-KEN

図 9



風呂敷(ふろしき)

物を包む布の起源は奈良時代から。エコバックに並ぶリユース製品。



昭和31年10月 敷島町
撮影/内田宏氏

Digi-KEN

図 10



「一升瓶(いっしょうびん)」
ガラス製で密閉性が高く、多彩な飲料や調味料の容器として用いられる。明治時代日本酒向けに製造が開始。規格化されているので、汎用性も高い。現在でも同一規格で普及、デポジット制に相当する再利用・流通体制が確立。



昭和31年10月 敷島町
撮影/内田宏氏

Digi-KEN

図 11

子守の少女」。また両方の写真に「昭31.10中巨摩郡敷島町」とあります。このように内田氏の写真については、写真と一緒に基本的な情報が書き記されているものが多くあります。

では1956年(昭和31年)とはどんな時代だったのでしょ。う。「もはや戦後ではない」この年の経済白書にはこの言葉が登場し、日本経済の戦後復興期は終わったとの判断が示されとされています。政治では石橋湛山内閣が成立、石原裕次郎さんが主演した映画「太陽の季節」が公開されたのもこの年です。世の中が急激に発展し、華やかな時代の訪れを思わせますが、まだまだ素朴でみんなが力を合わせて生活している、そんな山梨の農村の様子がこの写真(図8)から伺うことができます。

1つ目の特徴として、この時代の子供達が赤ちゃんを背負っている写真が数多くあります。兄弟姉妹が多かった時代、小学校に入る頃には子守は子供の大切な役目でした。2つ目の特徴は、女の子はおかっぱかお下げ髪で、大抵の男の子は坊主頭です。3つ目の特徴は、大人の女性は割烹着にもんぺ、ほっかむりというスタイルです。

図8の右の写真を拡大したのが図9です。荷台に乗せてある袋のような物は籐(むしろ)を二つ折りにして縫い合わせた吠(かます)という農業資材です。広辞苑によると、籐(むしろ)は藎草(いぐさ)・蒲(がま)藁(笑)・竹などで編んだ敷物の総称です。主に敷物としても用いられますが、特に穀類を天日で干すのに欠かせないものとされていました。左の写真のように、籐を二つ折りに縫い合わせると、かますとなり穀物などを貯蔵、運搬するのに使われました。

図10で、可愛らしい子供が手にしているのは、風呂敷です。物を包む布としての起源は奈良時代に遡るようですが、広辞苑によると、風呂に入る時には衣類を包んでおき、湯からあがった時には足を拭うのに用いた布、とあります。何度でも何にでも使え、持ち運び便利な包装材である風呂敷は、大量消費社会の形成で姿を消しつつありました。しかし、ここ数年レジ袋問題に歯止めをかけているエコバックより、ずっと昔からある、リユース製品の先駆けということで近年ではまたこの風呂敷が見直されているようです。

図11の女の子が抱えているのが、現代でも使用されている一升瓶です。ガラス製であることから密閉性が高く、多彩な飲料や調味料の容器として用いられ、日本国内では様々なところで利用されてきました。明治時代、

日本酒むけに製造が始まったとされているので歴史は古いです。

規格化されていることから、ラベルの剥離と貼付のみで内容物の変更に対処できる点で汎用性も高く、現在でも同一規格で普及しているため、デポジット制に相当する再利用・流通体制が確立されています。こちらも代表的なリユース製品です。

以上、いくつか道具を見てきましたが、私たちの生活の中から消えつつあるものもあります。でも、国土が狭く資源が少ない日本では、古くから物を大事にする文化がありましたし、物は最初から再使用を前提とされていました。私たちの生活は便利になりましたが、この時代に学ぶことは沢山ありそうです。

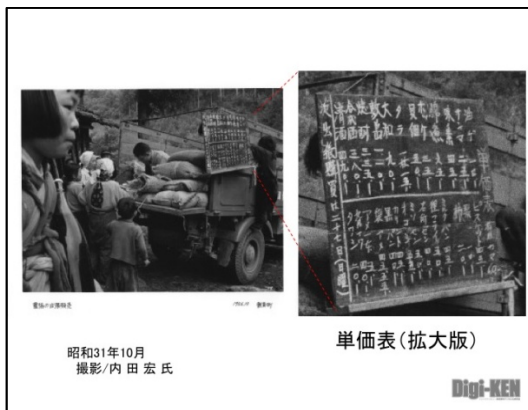


図 12

さて、当時の出張販売では何が売られていたのか見ていきたいと思います。図 12 では、左側の写真から商品の単価表だけを拡大しています。少し見にくいかもしれませんが、油ゲ（油揚げ）15円、サンマ25円、味素（味噌）45円、ホッケ35円、貝佃50円等々二十数種類書かれているのが読み取れます。

当時、サラリーマンの初任給は1万円前後、公務員の大卒初任給は8,700円、公務員の高卒初任給に至っては5,900円。牛乳13円、かけそば30円、ラーメン45円、喫茶店ではコーヒー1杯50円、銭湯15円、週刊誌30円、新聞購読料330円、映画館140円だったそうです。

移動販売というのは、現代社会でも買い物をするのに不便な地域の人々にとってとても便利なシステムですが、当時も本当に様々なものが売られています。

上記の価格表の中で、現在見かけなくなったものには、「合成酒」というのがあります。合成酒とは、アルコールにブドウ糖・有機酸・アミノ酸などを加えて、清酒に似た風味を持つように造ったお酒のことで、合成清酒のことです。昔は、日常的に飲む場合は安価な合成酒、お祝い事などがある場合に清酒を飲むというように、生活の中で使い分けていたようです。

また「大和」という表記があり、恐らく「大和煮」の事だと思いますが、辞書などには牛肉などを醤油・砂糖・生姜などで似たものと書かれています。現在流通しているものは、牛肉の大和煮のようですが、大変味付けが濃く素材の味を消してしまうため、クセの強い肉や質の悪い肉であっても素材として使うことができる料理方法のようです。当時は捕鯨が盛んだったことから、昭和30年代は鯨肉が大和煮として売られていました。

2つの写真から、村の暮らしの様々なことが見えてくることにお分かりいただけたと思います。



図 13

2-4. 写真を読み解く（その2：風景）

左の写真（図 13）は中山梅三氏が昭和30年代に撮影したもので、タイトルは「葦崎所見」、場所は葦崎市と記録されています。それ以上の情報が無いので、ある程度の場所を特定してみることにします。

この写真から場所を特定するための大きなポイントは、「山」と「線路の位置」です。山梨県のように四方八方を山で囲まれた地形では、その写真に写っている山がどこから見た場所かを特定することで、大体の場所をつ

かめます。また写っている電車や特徴的な建物等で判断します。



図 14



図 15



図 16



図 17

図 14 の写真では「甲斐駒ヶ岳」の位置とその手前の山の稜線に注目します。更に、列車が走っている場所を考えると、韮崎市で写真のように線路を左手に見て写真を撮れる場所、と特定していくと、塩崎駅を出発しトンネルを過ぎて、そこから韮崎駅までの間。更には山の位置から判断します。

そうすることによって、この写真の場所を特定することが出来ました。図 15 の写真の下がそれです。実は、この場所を特定するのに、Google マップのストリートビュー機能を使いました。この画像は平成 26 年 8 月に撮影されたものです。皆さんも普段からネットで地図を見たりするかもしれませんが、この機能を使ってこんなにくっきりはっきり場所を確認することが出来るのです。残念ながら雲が多く、甲斐駒ヶ岳が隠れてしまっていますが、ここで間違い無いと思います。

場所が特定出来たので、実際に現地へ行って撮影した写真が図 16 の写真下のものです。当日は雲が多く、甲斐駒ヶ岳が隠れてしまって、Google マップとほぼ変わらない写真になってしまったのが残念です。当時より建物は増えましたが、田んぼの位置は変わっていませんし、もちろん山の位置もそのままです。

またこの写真からわかる事として、何と言っても目を引くのが、蒸気機関車です。中央本線は戦前に甲府まで電化が進んでいました。1964年（昭和39年）には上諏訪まで電化が完成していたようです。電化前には9600や、デゴイチの愛称で親しまれたD51等の大型機が主力で活躍し、4輛のC12が配属、最晩年はC125等が走っていたようです。

図 17 の写真が C 1 2 5 です。この写真は、韮崎市にある韮崎中央公園で撮ったものです。普段良く利用する公園で S L があることは知っていましたが、今回撮影に行くまでこの S L が C 1 2 5 だということを知りませんでした。S L の隣には、このような説明書きがあり、昭和 4 5 年 4 月に廃車になるまでに全走行距離にして地球を約 3 2 周走った、と書かれていました。

一つのことを突き詰めて行くと、いろんな発見があるものです。更に図 14 の昭和 30 年代の写真を見てみると、田んぼの様子から、脱穀が済み、藁が散らしてある様子がわかります。また山々には積雪がある事から、季節は 1 1 月～1 2 月といったところでしょうか。

写真をご覧いただきながら、写真を読み解いてきましたが、私たちが写真を読み解く際に、い

ろいろなものから情報を得てきます。

- ・本や参考資料
- ・ウィキペディアや Google マップなどのインターネット情報
- ・当時のことを知る人から聞く、現地に行ってみる…など

デジタルアーカイブとは「個人が得た知識や経験などを社会全体で共有し、新たな課題に挑戦できるよう、未来に伝達すること」です。私たちデジ研はデジタル技術を使って、過去や現在の出来事を地域の記憶として共有し、未来への希望や活力づくりに向けたデジタルアーカイブに取り組んでいます。そして何より、このような作業を通じで自分自身が新しい発見をすることはとても楽しいことです。

ここまでは、私たちが普段どのように昭和の記録写真を読み解いているか具体的にお話をしてきました。次章では、私たちがデジタルアーカイブした地域資料を見ていきます。

第3章 デジ研のデジタル・アーカイブスで昭和の山梨を見る

担当：中澤京子

ここからはデジ研が作って来たデジタル・アーカイブスを「昭和の山梨」というテーマでご紹介します。この講座にお集まり頂いた皆様が過ごしていらした時代ですので、ご覧になって頂くと懐かしく、元気が出ると思います。

○第3章でご覧頂くアーカイブス

1. インターネット公開中のアーカイブス

1-1. 単行本を通して：「郷土風景」

(<http://www.digi-ken.org/archives/kyodo/index.html>)



図 18

図1は昭和8年発行、山梨師範学校の教師・矢崎好幸先生と学生さんが郷土山梨の風景を版画にし、解説を書いている「郷土風景」という本です。この本を読むと、昭和初期の山梨の政治、産業、風物、生活、教育、宗教、史跡名勝、景勝地について一通りの知識を得られます。

実はこの本、有価物としてゴミ置き場に捨てられていました。代替わりでもしたのでしょいか、断捨離でもしたのでしょいか。私はもったいないと思い、地区の自治会長の許可を得た上で自宅に持ち帰りました。そして、この本を残したい一心で何のコンピュータの知識もなかったのに、デジタル・アーカイブを作り、インターネットでの公開を始めました。

始めました。

図2は甲府市役所です。今では見ることが出来ない当時の様子に思いを馳せることができます。



図 19



図 20

図3は製糸工場の稼働する風景です。八十四工場に男女工、六千人が働いていたと書かれています。養蚕と製糸は日本の近代化の大きな力となりました。山梨は長野や群馬と並んで国内の製糸を主導していましたが、この本が発行された頃、丁度生産量のピークを迎えていました。南アルプスをバックに煙突から煙をたなびかせる製糸工場の姿は、今では写真集でも見ることが出来ません。

本の作りも当時の県知事等の題字や印刷ではない本物の版木の添付など今の本にはない凝ったものです。(図4、図5、図6)



図 21



図 22



図 23

出版から今年で85年が経ち(平成30年の時点で)、多くの人がこの本を手にとって楽しむことは出来なくなりました。

しかし、デジタル化することで、これから更に劣化していく「物としての本」をその時のままの状態で保存することが出来ました。そしてインターネットで公開することで、いつでもだれでもどこでも見る事が出来るようになりました。地震で本が水没しても火事にあっても、インターネット上に掲載されている限り見る事が出来ます。

また本にはそれなりのサイズと重さがありますが、デジタル化してインターネットで公開すると小さなスマホでも見る事が出来ます。持ち運びには便利です。

もしあの日ゴミとして回収されてしまっていたら、本日皆様にお見せすることは出来ませんでした。個人として要らなくても、皆の共通財産として残すべきものを救いましょう。

捨てたくはないけれど捨てざるを得ない時、どうぞデジ研に声を掛けて下さい。

1-2. 芸術を通して：「桑原浜子の世界－卵殻モザイクを育てて－」

(<http://www5.nns.ne.jp/pri/mk-nkzw/rankaku/>)



図 24

次は美しく、芸術をデジタル化したものを見ていきましょう。「桑原浜子の世界－卵殻モザイクを育てて－」です。卵の殻に色を塗ってモザイク画を作った桑原浜子先生の作品です。

卵殻モザイクは前述の山梨師範学校の矢崎好幸先生によって昭和初期に考案されましたが、桑原先生は矢崎先生の研究所で直接指導を受けました。

そして現在の笛吹市の境川村にアトリエを構え、山梨の風景そのままを作品にしました。図7はアトリエから見える藤袋(ふじぬた)の景色です。

卵の殻と殻の接合する線がモザイクの醍醐味ですが、さらに卵の殻にカーブがあるため、殻を

台に貼り付ける時に自由に入れられる亀裂に趣があり、卵殻モザイクの妙味です。（図8）

図9は甲斐駒です。

卵殻モザイクは、当時全国を巡る500回の講習会によって学校教育にも組み込まれ、身近に手に入る材料・卵の殻で日常生活に潤いと幸福感をもたらしました。

作品をデジタル化してインターネットに公開することによって、このような素晴らしい芸術があることを皆に伝え、卵殻モザイクの継続と発展の手助けになっています。



図 25



図 26

1-3. フィルムを通して：甲府市中心街の記憶

(<https://www.mmdb.net/usr/digiken/kofutyusin/cat/index.html>)

次は、急激に変化していく甲府市中心街の様子をデジ研会員が撮影した写真のデジタル・アーカイブスでご覧頂きましょう。

平成22年、甲府市役所本庁舎、山梨県庁南別館、県民情報プラザは解体撤去され、新たな庁舎が建設されました。27年には山梨県民会館も解体撤去され、跡地は駐車場となりました。

このように、デジ研では過去ばかりでなく、私たちが生きている時代もアーカイブしています。

図10の写真は、今は失われてしまった、甲府市役所としては4代目の庁舎・1号館です。

現在の南アルプス市出身で東京タワーを設計した内藤多仲氏の設計で、昭和36年に竣工しました。事務棟は鉄筋コンクリート造り、地上5階地下1階建、議会棟は地上2階建てでした。

図11の写真は甲府市役所本庁舎4号館です。

昭和6年に甲府中央郵便局として山田守氏の設計により竣工された地上2階建ての建物です。昭



図 27



図 28



図 29



図 30



図 31



図 32

和 50 年に市庁舎として取得されました。昭和の名建築として、保存運動が展開されましたが、耐震補強を含めた保存費用が膨大になるなどの理由で保存を断念しました。

図 1 2 は、山梨県庁第 1 南別館です。昭和 5 年に建てられた昭和モダンの建築でした。甲州財閥の巨頭であり、政治家でもあった根津嘉一郎氏が建設費を寄贈しました。

昭和 45 年まで県立図書館として使われた後は、県庁舎南別館として平成 21 年まで使用されました。

第二次大戦後の占領時代には GHQ 甲府軍政部が置かれました。

歴史的価値があるため保存も検討されましたが、耐震性の問題により最終的に解体となりました。

図 1 3 は山梨県民会館です。大型公会堂と貸し事務所が入る複合ビルでした。やはり内藤多仲氏の設計です。残念ながら、この写真撮影時には公会堂部分がすでに取り壊されていました。

公会堂部分は昭和 32 年、貸しビル部分は昭和 35 年に完成しました。鉄筋コンクリート地上 8 階地下 1 階、当時山梨県で最も高いビルでした。

県民会館の完成により、山梨県でも芸能、芸術文化、講演など大規模な催し物を屋内で開催出来るようになりました。私も小学生の時、ソ連のポリショイバレエの公演・白鳥の湖を見に来たことを覚えています。小さな子どもの情緒を育てる場にもなっていました。

山梨県民会館の建設中の写真も併せて公開しています。

図 1 4 は、県庁の職員で農業政策に携わっていた内田宏氏が昭和 28 年に撮影したものです。

先程の県民会館の写真には残っていなかった公会堂部分の入り口の様子を、デジ研で保存している写真でご覧頂きましょう。(図 1 5)

甲府市の写真愛好家のリーダー的存在である中山梅三氏が昭和 36 年県民会館で撮影した写真「甲府市成年式」です。

出席している人の顔を見ると、今の二十歳の青年達より大人っぽい気がします。写真の出席者が中学校を卒業した頃、日本の高等学校・高等専門学校への進学率が 50%、18 歳の頃、大学進学率は 10%。ほとんどの人が社会人として働いていたからと思われます。

1-4. フィルムを通して：農業改良の歴史

次は、第2章でご紹介した写真の作者・内田宏氏と中山梅三氏の写真を通して、戦後の山梨の農業の改良の様子をご覧ください。

内田 宏氏 「よみがえる戦後山梨の記憶」
(<https://www.mmdb.net/usr/digiken/yomiyama/index.html>)
中山梅三氏 「みんなの山梨アルバム」
(<https://www.mmdb.net/usr/digiken/Yamanashi-Album/>)



図 33

馬耕により、人が手で耕していた頃よりは楽になりましたが、家畜を利用するには家畜との信頼に基づいた手綱さばきが上手くなくてははいけません。また家畜は扱うのに力が要ります。餌も食べさせなくてはなりませんし、管理もしなければなりません。農作業をするとお互いに疲れるので休みも必要です。

昭和23年、農業改良助長法が成立しました。

図18は、法により任命された山梨県農業改良普及員の研修風景です。

農民が農業及び生活に関する科学的・実用的な技術や知識を取得し活用出来るように、県内の地区ごとに普及事務所を設置、農業改良普及員と生活改良普及員をおきました。農民と普及員が共に農村の復興と農業の生産向上、生活の向上に力を合わせました。

図16は、人の手による田植えの様子です。

昭和20年、第二次世界大戦中の人手不足と肥料不足でお米がとれず、山林伐採によって山は荒廃していました。その上に、疎開していた人や復員して来た人が戻り、山梨県の人口は前年より20万人増加しました。不幸なことに台風にまで襲われ、土石流が発生、橋や田畑が流出し、身延線は寸断されました。

終戦直後の農政の最大の課題は「飢餓からの脱出」でしたが、手による田植えは効率がよくありませんでした。

図17は、春に馬の力を利用して田を鋤いていた昭和のお米づくりの様子の記録です。



図 34



図 35



図 36



図 37

図 19 は、農業改良普及員によるトラクターの実演です。

トラクターの登場で家畜を農地の耕耘に利用しなくて良くなりました。機械化のお陰で、一人で出来る仕事の範囲が広がりました。

図 20 は、田植え機の実演です。

従来の農業機械は欧米の広大な農場で使用している大きな農機具を直輸入したものでしたが、山梨県のように傾斜地が多く、耕作地の 1 枚 1 枚が狭く分散している土地には不向きでした。

工業技術の発展で、山梨の狭い土地に適した農機具も製造されるようになりました。

図 21 は、土壌検定をする農業改良普及員です。農業改良普及員は土壌検定器を農家巡回に持参し、検定の必要がありそうな田畑で働いている人がいると、目の前で土壌検定を行い、検定結果を見ながら土壌管理や肥料のやり方を説明しました。この指導により、農家は作物をたくさん収穫することができ、収入を増やすことができたのです。

図 22 は、農事メモを放送する農業改良普及員です。農業改良普及員は農業に役立つ情報を有線放送で伝達しました。村のラジオ放送局として人々の心をつなぐ強い力となりました。



図 38



図 39

明治以来、米麦の生産と養蚕に依存して来た山梨でしたが、日本経済の発展期になると、京浜商工業地帯に隣接するという土地の利を生かして、商品となる農産物を生産する都市近郊農業が推し進められました。

図 23 の写真は、農業生産物の変化によって、一面に広がっていた桑畑が一斉に果樹園に変わっていく様子です。



図 40



図 41



図 42

図 2 4 では、温室でブドウを栽培する取り組みが始まったことを伝えています。

農民は農業改良普及員と共に、優れた新技術で生産性の高い合理的な経営を目指しました

図 2 5 は、ぶどう狩りに観光客を呼び込んでいます。農家が現金収入を得るために観光農園にも取り組んだ様子が分かります。

図 2 6 は、イチゴ栽培の改良の様子です。イチゴは石垣に植えると、地面の泥の影響を受けません。太陽の温度、光によって、美味しい苺が早く出来ました。少しでも早くいちごを生産し、市場で高値で売りたい。こんな夢を石垣いちごに託しました。

図 2 7 は、農作物の市場出荷の改良の様子です。一定の品質を守るために機械化された共同選果場が作られ、共同販売体制が確立されました。



図 43



図 44



図 45

図 29 は、台所の古いかまどです。昭和 30 年代まで農家の台所には煙が充満しました。

図 30 は、農家の生活改良の工夫により煙突がつけられ、立って炊事が出来る様になった改善されたかまどです。

農業生産と生活は対等関係にあつて、生活向上が生産活動の向上に結びつくという考えに基づいています。

山梨県では、先ず現在の笛吹市石和町の富士見村で台所や風呂場の改善が始まりました。富士見村では、「かあちゃんの苦労を労おう」と積極的に取り組んだ結果、昭和 24 年秋までに 5 戸の農家の台所や風呂場が改善され、現地で行われた見学会には学者が 1 年で 8800 人も訪れたそうです。26 年には農林大臣賞を受けました。その後県が生活改良のために財政的支援を行い、山梨県は生活改善について全国水準をはるかに上回った先進県となっていきます。



図 46



図 47

生活改良の取り組みのなかで、栄養改善も進められていました。米食ばかりでなく、パン食の方が消化が良く、肉体労働をするには適していると、パン作りが薦められました。(図 31)

今ならスーパーで出来合のおかずを買ってくることも出来ますが、当時は農業の上に、家事も子育ても皆女性の肩に掛かっていました。その中で、少しでも効率よく生活するために、共同炊事というシステムが作られました。(図 32)



図 48



図 49



図 50

食生活の改善を図るために、移動出来る車で料理講習会を行い、栄養価の高い料理などを栄養士が実演指導していました。（図33）

キッチンカーに掲げられているポスターには「油をしっかりとりましょう」とあります。時代は変わるものです。このようにして、農家の食生活も変化していきました。



図 51

図34は、昭和33年12月7日新笹子隧道の開通の日を車の中から撮った写真です。門には「祝有料道路開通」と書かれています。

山梨県が京浜地域という大消費地に隣接しながらも経済発展が停滞していた理由の1つに、四方を急峻な山で囲まれているという地理的悪条件がありました。

県は昭和28年、「富める山梨」実現のため、山梨—東京間の時間的距離を短縮する計画を立て、33年に新笹子隧道が完成しました。御坂越えに比べて時間にして1時間40分、旧笹子隧道を通る道に比べて40分の短縮でした。



図 52

開通の日当日は、朝10時から大月市東小学校で開通記念式が開かれた後、道路公団総裁と県知事らは笹子口において約3000人の県民と共に開通を祝いました。道路公団総裁と知事の車を先頭に百数十台の自動車の列が新隧道を進み、約5分で通過して大和口から出て来ました。

図35は、県の広報課の車「ひかり」が「新笹子隧道」と書かれたトンネルから出て来るところです。

図 3 6 は、大和口での開通を祝う行事の様子です、大和村では日の丸の旗を手にした約 2 0 0 0 人が出迎え、お祝いをしました。

図 3 7 は、新笹子隧道の開通に伴い、新たに建設された首都圏へ続く道です。



図 53



図 54

新笹子隧道を中心としたこの国道二十号線の全面的改修は高度経済成長時代に間に合い、それまでの単線の中央線と不完全な道路に頼っていた山梨に好影響を及ぼしました。

農業では、食の変化に合わせ、農家の収入を大きく増す良質で希少価値の高い果物、野菜、卵、乳製品が生産されるようになりました。

交通インフラの整備により観光客も増えました。

新笹子隧道開通の日は、山梨が現在の「果樹王国山梨」になる始まり日であり、今や海外にも輸出される高品質な県産果物が世界へ届く第一歩を踏み出した日でもありました。

2. インターネット非公開のアーカイブス

次にインターネット非公開のデジ研アーカイブスを、2つご紹介します。「笹子追分人形」と「早川町奈良田の方言」です、どちらもハイビジョン映像で記録したもので、デジ研ではDVDにして保存を図っています。

2-1. 笹子追分人形

笹子追分人形は甲州街道の宿場町・大月で、江戸から明治にかけて旅人を楽しませた人形芝居です。



図 55

昭和 3 5 年、県の無形文化財に指定されましたが平成 6 年で途絶えました。その後笹子追分人形保存会が復活させ、公演を開始するに当たり、その記録をデジ研が担当しています。

笹子追分人形は三人遣いであり、ひとりが人形の頭と右手を担当、ひとりが人形の左手を担当、そしてもうひとりが足を担当し、3人が一体になって人形を動かすというのが特徴です。

映像の記録により、昔宿場に泊まった人々を楽しませた人形芝居を公演以外でも見られると共に、保存会の記録になり、文化財としての郷土芸能継続の力となっています。

図 3 8 の写真は、笹子追分人形の代表的演目である「吉

窪美人鏡」の一場面です。

あらすじ：笹子川のほとりに住むおよ志は働き者の良い娘。庄屋の息子に言い寄られますが頑として受け付けません。それというのも若い僧に恋をしていたからです。およ志はある晩思い切っって直接思いの丈を伝えますが、修行中の身と断られてしまいます。失意と怒りのあまり池に身を投げますが、口惜しさに死んでも成仏できず、般若の顔となって現れます。その面の変化が大きな見せ場です。

2-2. 早川町奈良田の方言

早川町奈良田は南アルプス北岳の麓、早川の源流にあります。地形上、他郷の人々との交流が少なかったため、甲州方言の中でも特異な存在として「方言の島」と呼ばれています。

特徴は、古語が多く残存していること、ズとツ・ジとヂの発音を区別すること、アクセントが京阪型であること等です。現在(平成30年の時点で)この方言を話す人は10人もいません。

デジ研は平成20年から4年間かけてこの地の方言を撮影収録しました。

方言にはその土地の歴史や文化が含まれています。方言を記録することにより、その土地の文化を知るよすがを残すお手伝いをしています。(図39)

(DVD「奈良田のことば」はデジ研が有料で頒布しております)



図 56

○第3章のまとめ

デジ研のデジタルアーカイブスで昭和の山梨を振り返って頂きました。

思い返して見ると、私は一度も学校で近代の歴史を学んだことがありませんでした。4月に古代から始まる歴史の時間では年度末3月に教科書の最後まで辿り着けなかったからです。

しかし、私たちはアーカイブを作ることで近代史を少しずつ勉強しました。わからないことを発見して調べる。どのようにしてアーカイブを公開すれば良いか調べる。何と楽しいこと！

私達がどうしてこの活動をしているかと言うと、地域の資料は住民が保存しなければ誰も保存してくれない、地域を知っている住民が行うからこそ質の高いデジタル・アーカイブが出来ると考えるからです。多くの皆様にご覧頂き、お役立て頂ければ、嬉しい限りです。



図 57

この章では以下のことについてお話しします。

- ① あらためて「アーカイブ」とは
- ② 身近な生活記録のおすすめ
- ③ 撮影のポイント（その1：情報を残す）
- ④ 撮影のポイント（その2：画質）
- ⑤ 写真の整理・保存

まずはもう一度アーカイブという事についてまとめます。そして、自分たちにも出来そうな身近な生活を記録していくことの大切さについてお話しします。現在はスマートフォンやデジタルカメラで気軽に撮影が可能な時代です。写真を撮影する際のポイントと撮った写真を整理・保存するヒントに触れてみます。

4-1. 改めて「アーカイブ」とは

アーカイブはアーカイブスと記されることもあります。アーカイブは日本語で保存記録、記録を保存しておく所と言い換えられます。デジタルアーカイブは保存電子資料と言い換えられます。図書・出版物、公文書、美術品・博物品・歴史資料等公共的な知的資産をデジタル化し、インターネット上で公開して、電子情報として共有し、利用する仕組みを指します。これまで、ラジオ・テレビでは一斉に同じ情報が届けられてきました。今やインターネットの時代になり、誰でも欲しい情報を自ら探し出して得られるようになりました。

4-2. 身近な生活記録のおすすめ

例えば、ある特定の場所でしか知られていなかった資料も地域に根ざした個人の資料もデジタルアーカイブで公開して広く利用されればその価値が認識されることに繋がり、ひいては地域の活性化や観光の促進につながると考えられています。身の周りの生活の記録が半世紀後には「昔の人々の文化」となることを、数十年前の資料をデジタル化して感じています。

「50年に一度の災害」とか「平成から年号が変わる時」など、特別な時でなくて良いのです。これは貴重だ、というほどではないけれども、今を生きている自分たちの普通の毎日を撮影して残しましょう。現在では身近ないつも持つて歩けるスマートフォン、デジタルカメラなどでも、未来に残すのに十分な画像が撮影できます。

4-3. 写真撮影時のポイント（その1：情報を残す）

写真を撮る際のポイントは、いつどこでどんな状況で撮影したものかなど、いわゆる5W1Hを念頭にして、被写体への手がかかりも入れると良いです。撮影するのは私にとっての“今＝普通の毎日”でも、その光景を知らない人が数十年後に見た時に“いつ・どんな状況で”が判るように写真を理解するてがかりを残しましょう。

ここで今年の春（2018年）スマートフォンで撮った写真を2枚見ていただきます。



図 58

図2の写真がサクラだということは判りますか？私は植物が好きなので葉が大きい桜だと判りましたが、花はオフホワイトのような白で一重の大輪でした。しかも他の桜より少し遅く咲いていました。この写真への情報として、季節は春なのですが、花の名前や場所など情報をプラスしたいです。近くの建物とか遠くの山とか入れて写すと、写真への手がかりを残すことができます。



図 59

図3は2枚目の写真です。少し引いて撮影したもので、下の立札を読んでみると、花の名前は「太白桜（タイハクザクラ）」、花びらが桜の中で最も大きく、5cm余りの大輪で純白。日本では一度絶滅した品種で、1932年にイギリスから逆輸入された植物だと解りました。更に、桜の向こうに駐車場のラインが写っているので、場所は広い施設の中ということは想像してもらえますか？実はここは私が良く行くアルプス通り沿いの甲斐市にあるK a i・遊・パークです。

<太白桜の歴史>

今回この講座があり、この植物を「タイハクザクラ」の名前をてがかりに調べてみました。すると山梨県内に既に明治時代にあったものだということが分かりました。

明治後期、現在の甲府市大津町から中央市乙黒にかけての笛吹川の土手沿いに咲き誇っていて、たくさんの方が花見に来て、その地名から「乙黒桜」と言われて親しまれていたそうです。その後河川の改修に伴いその桜は姿を消してしまいました。ところが、最近甲府市北口の甲府市歴史公園に苗木が寄贈されて2011年からは「太白桜まつり」が「よっちゃばれ広場」でおこなわれるほどに時期には咲き誇っているそうです。来年是非見に行ってみたいです！

このように、被写体への手がかりは、アップにしてみたり、少し下がって写してみたりすると残せるかもしれません。周囲の様子を観察して撮影しましょう。

花の美しさにアップで撮った私ですが、なんという花だろうと撮った2枚目の写真がなければ「タイハクザクラ」の歴史にたどり着くことはなかったと思います。

！！手がかりを残すことが大切です！！

4-4. 写真撮影時のポイント（その2：画質）

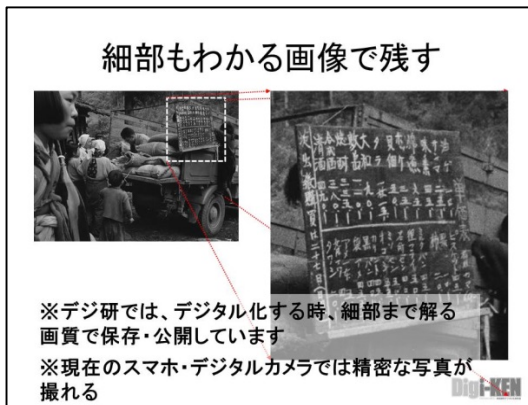


図 60

さて、ここまでは写真に付けてほしい情報の話でしたが、これから写真を撮影する時の画質について話を少しさせていただきます。前述の移動販売車の写真（図4）では販売物品のサンマが“二十五円”であるのが読めるほどすみずみのことまでわかりました。デジ研では細部までわかる画質で保存して公開しているので、このようなことが可能なのです。

スマートフォンやデジタルカメラでは「解像度」というものを設定できるのを御存知ですか？その設定画面では例えば2Mとか5Mとか書かれているのですが、この数字

が大きくなるほど細部もわかる写真が撮れるように設定出来るのです。現在のスマートフォンやデジタルカメラは性能が良くなり、精密な写真が撮れるようになりました。

現在のデジ研のホームページでは内田氏・中山氏の写真を、少し大きいサイズを「Lサイズ」から。細部が確認できる画像を「オリジナル」からご覧いただけます。

図5で、下の交換される薬というページの、オリジナルをクリックすると

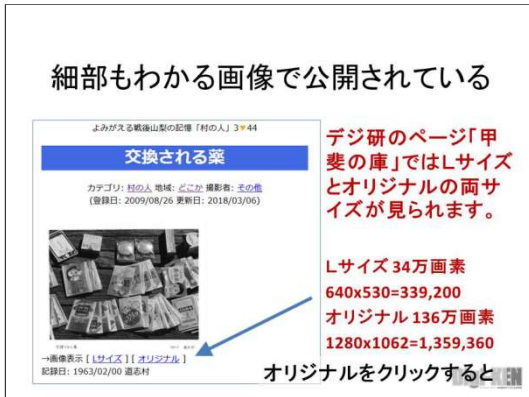


図 61



クリックすると ⇒

図 62

拡大された図6では、真ん中から左の「強力せきどめ」の女性の絵から右に「子供かぜせきトンプク」、「小児救命丸」、下に、「だるまとんぷく」、「ケロリン」等の文字が、細部まで鮮明にはっきり見えます。これらの薬から当時暮らしの中で何の病気に困っていたか何を大切にしていたか、よく分かります。風邪を引いた、子供が病気になった時のために、という意識が垣間見えます。今や60代の私も子どもの頃ケロリンに何度もお世話になりました。とても懐かしいです。すみずみまで見える写真を残したいと思える写真です。

4-5. 写真の整理・保存

スマホやデジカメのおかげで手軽に写真が撮れるようになりましたが、撮った写真がそのままになっているということはありませんか？

いずれの写真もあまりためないうちに整理し、「あれ？これ何の写真だっけ？」ということが無いようにしておくことが大切です。

方法としてデジタルデータの保存とプリントアウトして保存しておく例をお話しします。



図 63

A) デジタルデータで保存

私は普段からパソコンを使っているので、撮った写真をスマホやデジカメからパソコンに取込んで、フォルダという所に、日付や場所の名前を付けて保存しています。パソコンではフォルダに好きな名前を付けて、その中に写真をまとめておくことが出来、お薦めです。

図7の2枚の写真は「20080928稲刈り」というフォルダに保存してありました。数字は日付でその後ろに何の写真かがわかるフォルダ名をつけて保存してありました。つまり、2008年9月28日に家の田で稲刈り作業をした時の写真です。フォルダ名に場所も入れておく

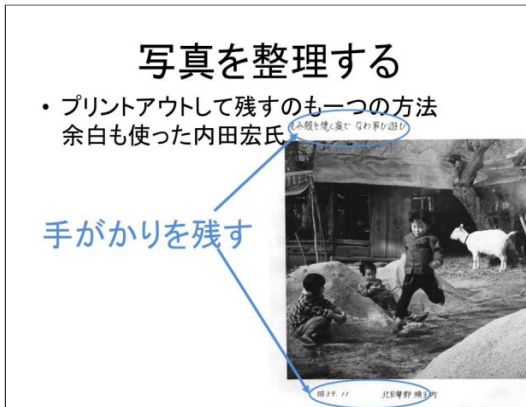


図 64

と良かったと反省しています。この写真には場所の手がかりも全くないからです。

B) 印刷して保存

写真をプリントアウトしておくのも一つの方法です。これは見てほしいというデジタルデータを印刷します。そして、写真の余白にタイトル・撮影年・撮影場所をメモしましょう。

図8のプリントアウトされた内田氏の写真では、余白にメモが残されていたお陰で、それを手掛かりに写真に説明をつけることができました。

内田氏・中山氏の写真は昭和という時代の人々が懸命に生きていた事を現代の子ども達に示す証拠写真になっています。同じように、自分が撮った写真も山梨の歴史です。皆さんが今撮った写真が平成という時代の山梨の証拠写真になっていくかもしれません。

大切なデータです、これは見てほしいという写真は、整理・保存したり、プリントアウトしたりして未来の誰かと共有しましょう。

最後に写真に限らず、皆さんがこれまで懸命に残してきた様々な資料も、未来の歴史、大切な共有財産になりえます。

デジタル化して残すことを試みてはいかがでしょうか。

当デジタル化研究会では定期的に学習会をしております。皆様の記録した資料、ご経験こそ山梨の歴史を磨き観光資源に繋がります。

今回の講座で私共の取り組みにご興味をお持ち頂けましたら、次回の学習会へのご参加をお待ちしております。



図 65